

魯庵訳『罪と罰』の再検討 ——英訳からの重訳、二葉亭との協同訳を考える——*

加 藤 百 合

ドストエフスキーの『罪と罰』（Преступление и наказание, 1866）の初の日本語訳は、内田魯庵（内田^{みつぎ}貢, 1868-1929）によって成された。『~~魯~~罪と罰』『卷之一』『卷之二』不知庵主人〔魯庵の別号〕譯（明治二五年）である。

明治二〇年代は、英語全盛期はまだ始まったばかりであり、また啓蒙を目的とした翻訳紹介の時期にあたる。実用翻訳が中心で、文学は英文学からシェイクスピアなどが、いわば世界文学の水準として示されたに過ぎず、ロシア文学がその存在を日本人に知られるのはおおそ日露戦争の前後になる。魯庵の『罪と罰』が極めて「早い」翻訳紹介であったことの意味は大きい¹。

明治元年生まれ²の魯庵がこの翻訳に取りかかったのは二十代半ば、作中の「元大学生」ラスコーリニコフと同じくらいの年齢に当たることも興味深い。彼は、『浮雲』は私の当時の愛読書の一つで、『あいびき』や『めぐりあい』をも感嘆して何度も反覆していた（魯庵「二葉亭餘談」）と語る新時代の文学青年であったが、『罪と罰』の英訳本を入手して読み出したときは余りにも暗く錯綜した小説世界を読みこなせず中途で放擲していた。その後、文学に悩み人生に悩み、行李一つ持って富士山の裾野に逃避した際、「行李に携えたこの一冊を」改めて取り出し、「再三再四反覆して初めて露西亞小説の偉大なるを驚嘆した」（同上）と回想する。

私が初めて甚深の感動を與へられ、小説に對して敬虔な信念を持つやうになつたのはドストエフスキーの『罪と罰』であつた。[…]^{あたか}恰も曠野に落雷に會ふて眼眩めき耳聾^しひたる如き、今までに會^{かつ}て覺えない甚深の感動を與へられた。夫れ以來、私の小説に對する考は全く一變して了つた。夫までは文學を輕視し、内心「時間潰^{キルタイム}し」に過ぎない遊戲と思ひながら面白半分の應援隊となつてゐたが、夫れ以來此の如き態度は嚴肅な文學に對する冒瀆であると思ひ、同時に私のやうな貧しい思想と稀薄な信念のものが遊戲的に文學を語るを空恐ろしく思つた。

同時に私は二葉亭を憶出した。巖本撫象が二葉亭は哲學者であると云つたのを奇異な感じを以て聞いてゐるが、ドストエフスキーの如き偉大な作家を産んだ露國の文學に造詣する二葉亭は如何なる人であらうと揣摩せずにはゐられなかつた。(内田魯庵「二葉亭餘談」『きのうけふ』大正五年)

「卷之一」出版後の反響は大きく、ことに既存の作家や若い文学青年達は強い衝撃を受けた。魯庵自身が収集し「卷之二」に収録した同時代評には、当時の文学者達が名を連ねている。作家として以外に泰西の作家の翻訳者としても既に名声の高かった坪内逍遙、饗庭篁村³が、私信をよこして感想を述べていることなどが注目される。いずれも素朴な口ぶりながら、英米文学とは異質なロシア文学の重苦しい心理（病理）描写に初めて接した感想を述べている。

第一巻だけを讀みたる處にては人間はげに一種の狂人にあらざれば一種の病人にして罪は病疾也憫むべきものなり惡むべきものにあらざるといふ事明著なるが如し弱志の人は之に對して厭世の念起るべく、やゝシツカリしたるものは pity compassion の念を生ずべし（坪内逍遙）

貴著一讀の後小生の感じは惘然として暗澹たる空室に獨坐するが如く何やら後より人の窮ひ見るが如く一種のビクツキを生じ殆んど主人公の罪と罰を半分引受け候様にて云ふべからざる不快の念を起し申候。（饗庭篁村）

旧世代の大御所とも言える^{よだがつかい}依田學海（1834-1909）は、次のような批評を書いている。

余が最も心に感じたるは此巻中に出づる二人の女子〔ソーニャと、ラスコーリニコフの妹ドゥーニャ〕とラスコーリニコフの一人の朋友〔ラズミーヒン〕なり。〔…〕之によりてみる時は作者は奇筆を揮て此殺人罪の事を寫すといへども實は此一事をかり來りて二孝女一信友を寫して社會の惡風を矯正せんとするものと見えたり。誰れか小説は勸懲を主とせずといふや。（依田學海「罪と罰の評」『國民之友』一七四号）

なんとか『罪と罰』に勸善懲惡の因果を読み取ろうとする様子は現代から見るとかえって理解しづらいが、儒學的道德の枠組で書かれた稗史に慣れていた

學海らの世代には、その埒外のもを受容することが困難だったのである。

それに対し、当時二十代の文学青年達は、社会の暗黒に個人が圧殺される恐怖の現実性を感じ、ドストエフスキーの文学に戦慄した。次の北村透谷の批評（學海の批評への反論として執筆された）は「魔力」という言葉を用いているが、社会文学、心理小説としてのドストエフスキー受容の優れて早いものである。

殺人罪は必ずしも或見ゆべき原因によりて成立つものにあらざるなり、[……] 我が「罪と罰」一卷に見るところのもの、全篇悉く慘憺たる血くさき殺戮の跡を印するを認むるなり、見よ、飲酒は彼^{かの}非職官吏を殺しつゝ、あるにあらずや、非職官吏の放蕩懶惰は其愛らしき妻を殺しつゝ、あるにあらずや、其無邪氣の娘を殺しつゝ、あるにあらずや [……] 最暗國 [ロシア] の社會にいかにおそろしき魔力の潜むありて、學問はあり分別ある腦髓の中に、學問なく分別なきものすら企つることを躊躇^{ためら}ふべきほどの惡事をたくらましめたるかを現はすは、蓋しこの書の主眼なり。[……] 信仰なきの人、自立なきの人、寛裕なきの人、徃々にして極めて慙れむべき悲觀に陥ることあるなり（北村透谷『『罪と罰』の殺人罪』『女學雜誌』三三六号）

透谷を通じ、島崎藤村、田山花袋などがドストエフスキー、ことに『罪と罰』の強い影響を受けたと言われる。

一般には「早すぎた」翻訳だったのか、「卷之二」において魯庵が「是等の物語が譯本「卷之三」として世に現るゝは五月中にありとす」と予告したにも拘わらず、続刊（卷之三）は現れることなく、当時の刊行基準（続刊を出すのに採算上必要だった部数⁴⁾）に達せず、中絶した。魯庵訳の『罪と罰』訳出は、原作で言って半分弱の分量に終わった。

しかしながら、魯庵訳は、明治期の文豪翻訳の記念碑とも言うべき「名訳」として、また、同時代日本文学として、当時から訳文テキストそのものが愛好された。冒頭のラスコーリニコフ初登場の「依剝昆垚里亞に均しき^{ヒボコンデリヤひと}ナーバス・デプレツション^{ナーバス・デプレツション}に罹」っていた（ルビは初出のまま）、というあたり、今読んでも明治二〇年代の香りがするようである。藤村が『春』の中に「青木」という主人公として透谷の若き日の姿を書きとどめたが、作品中で青木（透谷）は次のように語っていた。

「内田さんが譯した『罪と罰』の中にもあるよ、錢取りにも出かけない

で一鉢何を爲て居る、と下宿屋の婢に聞かれた時、考へることを爲て居る、とあの主人公が言ふところが有る。彼様いふことを既に言つてゐる人が有るかと思ふと驚くよ。考へることを爲て居る——丁度俺のは彼なんだね。」
(藤村「春」『東京朝日新聞』明治四一年)

やがて、明治三〇年代にはロシア文学の翻訳ブームと呼べるものが訪れ、チェーホフ、ツルゲーネフ、レフ・トルストイ、また、世紀末のシンボリズムを代表する作家達の作品が矢継ぎ早に翻訳され、また、同じ作品が複数の人によって翻訳されるなど、その翻訳ぶりは過熱した印象さえ与えるのであるが、魯庵の訳を引き継ごうとする文学者は現れなかった。読者は、魯庵の訳を読み、先を読みたい人は、英訳等で読み継いだ。結局、『罪と罰』が完訳されたのは1914年、中村白葉によるロシア語からの直接訳が新潮社の企画で行われるまで待たなくてはならなかった。これは大正三年である。明治二〇年代という『舞姫』『浮雲』などが鮮烈に登場した日本の近代文学胎生期から、日露戦争前後の豊饒な明治文学、自然主義の勃興から退廃までの期間、『罪と罰』は独り魯庵訳だけが在ったのである。藤村が、『破戒』を構想する際、花袋から『罪と罰』とメレジュコフスキーの評論『ドストエフスキーとトルストイ』を借り出して、それらを熟読し、机辺に置いて執筆したことが知られるが、その挿話ひとつをとっても、魯庵の翻訳の文学的意義は明らかである。

しかし、この高名な翻訳は、これまで、本格的な検討がなされることはなく、「名人芸」としていわば別格におかれ、原文とのテキスト比較も、以後現在まで十三種類もの日本語訳がある『罪と罰』の翻訳相互の比較も、行われなかったに等しい。

翻訳の事情については魯庵自身が具体的に書き残している。すなわち、「例言」(前書き)において、魯庵は自身の翻訳を、英訳を介した「重訳」とであると明言し、底本を明記している。また、二葉亭四迷に協力を仰いだと言っている。

一 余ハ魯文を解せざるを以て千八百八十六年^{ママ}板の英譯本（ヴキゼツテリイ社印行）より之を重譯す。疑ハしき處は惣て友人長谷川辰之助氏に就て之を正しぬ。本書が幸に英譯本の誤謬を免れし處多かるは一に是れ氏の力に關はるもの也。（「例言」『小説罪と罰』「卷之一」明治二五年）

重訳であるから、「ロシア語原作→英語訳」「英訳本→日本語訳」のそれぞれの段階を分けて考え、その上で、魯庵はあくまでも英文和訳を行ったのであるから、介在する英訳と直接的には比較検討する必要がある。しかし、英文学者は、あくまでロシア文学翻訳であるという理由から、露文学者は、ロシア語を知らない訳者の重訳であるという理由から、その作業を行ってこなかった。

また、大正二年に魯庵本人が全面的に改訳を施したのであるが、その際の「はしがき」によって、旧訳当時二葉亭が「原本と対比較勘した書入本及びノート」があったことがわかる。

此英譯は不完全であるが、幸ひに舊譯當時故二葉亭四迷氏に由て原本と對比校勘した書入本及びノートの殘存するものを基礎として若干補修した個處がある。夫故に英譯に由つたのであるが、必ずしも一々英譯通りでは無い。（「はしがき」『罪と罰 前篇』大正二年）

この、個人訳ではなく他の人の手が入った、いわば「協同訳」であるという事情、それも、ロシア文学の第一人者として知られる二葉亭四迷が友人として大いに助力した、ということが、さらに翻訳研究への敷居を高くしてきた。文学上の共著の実態（誰がどの部分にどのような貢献をし、どの部分が誰の手によるとみなすべきか）は、書き入れ本およびノートが現存していないこともあり、証明はまず不可能だからである。

さらに魯庵の訳の底本であるヴィゼッテリイ社版 1886 年刊行が入手困難であるという事情が、原作と魯庵訳の比較による曖昧な印象批評から出ることを決定的に困難にしてきた。同書は、魯庵が購入したほか三冊が丸善に入荷し、そのうち、坪内逍遙の旧蔵本が早稲田大学の書庫に残っている、と魯庵に師事した書誌学者木村毅が昭和四七年に書き残している⁵のであるが、筆者の調査によれば、たしかに所蔵記録はあるものの、いつの間にか行方不明となっている。

この版はロシア生まれのフレデリック・ウィッショー（F. Whishaw, 1854-1934）の翻訳で、原作の初めての英訳であり、魯庵が翻訳を志した明治二五年には唯一の英訳であった。しかし、やがてコンスタンス・ガーネット（C. Garnett, 1861-1946）による英訳が出ると、平易な（わかりやすい）ガーネット訳によって取って代えられ、今では英米圏においてもウィッショー訳は入手困難な版となってしまっている（エヴリマンズ・ライヴラリーに入っていた

ウィッシュー訳もガーネット訳に代えられた)。

本論は、ヴィゼッテリイ社の1886年初版を底本にして1996年にアメリカで出されたリプリント版 *Crime and Punishment*⁶ をもとに、魯庵の翻訳を評価する試みである。さらに、魯庵訳に二葉亭の果たした役割についても、原作、英訳、魯庵訳を検討することによって考察を試みたい。明治期には特にロシア文学翻訳について「重訳」が盛んに行われたが、はたして「重訳」は直接訳が不可能な場合にのみ許される逸脱なのか、それともより積極的に評価することが可能なのだろうか、この問いへの答も探してみたい。

『小説 罪と罰』「卷之一」

既に触れたように、「卷之二」には付録として「卷之一」刊行後の評論が収録されているのであるが、魯庵が、底本などに言及し、厳密なる翻訳であるという姿勢を公にしたためか、極めて具体的な、いわゆる誤訳指摘や、訳語の適否を問うような翻訳批評があらわれていたことがわかる。これは、翻訳が、文芸としての価値のみならず原本との整合性を問われた本邦初の例であると考えられる。

各自がロシア語原典、英訳、独訳、仏訳等を入手して魯庵の訳文を「点検」した翻訳批評がまず集中した冒頭部を取りあげて、魯庵の訳文の特徴を考察しよう。

テキスト① 冒頭部

七月上旬或蒸暑き晩方の事。^{なにがし}S……「ペレウーロク」(横町)の「五階造りの家」^{なにがし}の、道具附の小坐敷から一少年が突進して、狐疑逡巡の体でK……橋の方へのツそり出掛けた。

首尾よく階子の^{はしご}下口で主婦に出會はなかつたが、此家の主婦は^{このや}下坐敷に^{したざしき}住つて、^{だいどこ}臺所が^{じょう}常々戸の開いたまゝ^{はしご}階子に^{むかつ}對て居るので、いつでも少年が出かける時は、餘儀なく^{かまどまえ}敵の竈前を通り過ぎ、(卷之一、第一回)〔下線と□は引用者による〕

脱落、不正確、不必要(訳しすぎ)などの指摘があった部分を手がかりに原作、英訳と該当箇所を対照すると、魯庵の訳が全体として英訳に基本的に忠実であることがよくわかる。□に入れて示した「五階造りの家」という部分は、

原作では第二文にあるが、ウィッシューは一文目に繰り上げて訳していた。こうした語順・構文などから、魯庵訳が、原典ではなくウィッシュー訳の特徴を引き継いだ英文和訳であることが、訳文からも再確認できる。原作の、太字で示した部分にあたる次の情報は英訳に見られず、従って魯庵訳からも脱落していることをここで指摘しておこう。二つ目の部分は、目立たないが重要な脱落である。

которую нанимал от жильцов [住人から間借りしている]

походила более на шкаф, чем на квартиру [部屋というよりはむしろ戸棚に似ていた]

у которой он нанимал эту каморку с обедом и прислугой [主婦から賄い付き・下婢つきで間借り]

下線を付した「敵の竈前かまどまえを通り過ぎ」というようなやや凝った修辞は、原作では単に、主婦の台所の脇を通らなければならない、というだけであり、英語の“pass under the enemy's fire”がなければこの訳語は生まれ得ない⁷。

В начале июля, в чрезвычайно жаркое время, под вечер, один молодой человек вышел из своей каморки, которую нанимал от жильцов в С-м переулке, на улицу и медленно, как бы в нерешимости, отправился к К-ну мосту.

Он благополучно избегнул встречи с своею хозяйкой на лестнице. Каморка его приходилась под самою кровлей высокого пятиэтажного дома и походила более на шкаф, чем на квартиру. Квартирная же хозяйка его, у которой он нанимал эту каморку с обедом и прислугой, помещалась одною лестницей ниже, в отдельной квартире, и каждый раз, при выходе на улицу, ему непременно надо было проходить мимо хозяйкиной кухни, почти всегда настежь отворенной на лестницу. (Часть I-I)

One sultry evening early in July a young man emerged from the small furnished lodging he occupied in a large five-storied house in the Pereoulouk S——, and turned slowly, with an air of indecision, towards the K—— bridge. He was fortunate enough not to meet his land-

lady on the stairs. She occupied the floor beneath him, and her kitchen, with its usually-open door, was entered from the staircase. Thus, whenever the young man went out, he found himself obliged to pass under the enemy's fire, (Part I, Chapter I)

しかし、おそらく最も目につく魯庵訳の特徴は、「S……「ペレウーロク」(横町)」というような訳し方であろう。日本語訳の中に唐突に、イニシャルを残し、ペレウーロク(露 ^{なにがし} переулк)というロシア語を入れ込んで、「某^{なにがし}横町」とあるべき「日本語訳」はルビと()の中の註におしこめてある。同時代批評もそこを奇異に感じ、魯庵がこの語を、ロシア文学らしいエキゾチズムを強調するべくロシア語原文からもってきた(南海散史「一体露語は、邦人の爲に耳新しく聞こゆるを以て、譯者は、爰に文學界にも、一種の露語風を吹かさんとて、斯くは露語を挿入したるにはあらざる乎」)、と批判した。

ところが、ウィッシュョー訳をみれば、“in the Pereoulouk S——”と、アルファベット表記⁸でロシア語を残していることがわかる。比較のため、第一文のガーネット訳を挙げると、“On an exceptionally hot evening early in July a young man came out of the garret in which he lodged in S. Place and walked slowly, as though in hesitation, towards K. bridge.”であり、S. Place と訳されている。Street / Place といった訳語の選択の可否は措くとして、ガーネット訳ではロシア語は全て滑らかな英語に訳されているのに対し、ウィッシュョーが既にロシア語のアルファベット表記を混ぜ込んで残す奇妙な操作をしていたのである。言ってみれば、不必要なロシア語を訳文に残した責任は魯庵でなくウィッシュョーにある。魯庵は、説明も無く英文に挿入された(未知の英単語か、と英語辞書にあたってもそこには無い)ロシア語にぶつかって、探索にあぐねて二葉亭に照会し、ロシア語と判明しその意味を注記した、という手順を踏んだと考えられる。

魯庵が翻訳底本とした英訳がガーネットなどのわかりやすい訳でなく、ロシア語の知識をも要請する難解なウィッシュョー訳であったことは、魯庵が二葉亭の助力を必要としたという意味で重要である。英訳を底本として世界文学を翻訳することにおいては、魯庵は経験も豊富で自信もあった。ゲーテ等も重視しており、ロシア語を知らず原典を読めないことはこの時点までは少なくとも問題としていなかったのである。

こうして「協同訳」の試みがはじまるのであるが、最初のうちは、魯庵が個

別に疑問点を二葉亭に質問し、二葉亭がその質問に答える、というかたちで、二葉亭の主体的な関与／協力とは言えないように思われる。

続いて、同様に訳文に外国語（特にロシア語）が混入している部分に注目して、魯庵が二葉亭に助けを求めたであろう箇所を拾ってみよう。下線は引用者が付したものである。

- 1) 此家に屬する番人（魯西亞語「ドボールニク」）は三四人も有ツたが、
（卷之一、第一回）

There were three or four *dvorniks* belonging to the house, (Part I, Chapter I)

英訳をみると、この箇所もロシア語（*дворники*）がアルファベット表記で入れ込んであり、しかもイタリックス（斜字体）で強調されている。魯庵は英文中のこの単語がロシア語起源であると注記した上で訳しているのである。

- 2) 先生、僕だッて實着なものに教育の必要なア知てる。是でも僕は身分ある者で「ティツリャールヌイ、ソベツトニク」（九等屬？）マルメラードフと申します。失禮ながら先生は何をお勤めです。（卷之一、第二回）

I, myself, have always attached great importance to education, when united to substantial qualities. I belong to the *tchin*. Allow me to introduce myself as Marmeladoff, a titular councillor. May I ask whether you are in the service? (Part I, Chapter II)

せっかく官職にありつきながらしくじって、自棄になって下等な飲み屋で飲んだくれるマルメラードフが、ラスコーリニコフに目をとめて、威儀を正して自己紹介する場面である。彼が口にする、（ロシア語の官位名の直訳である）*a titular councillor* という官位はどの程度のものか——これは、社会の中のマルメラードフの位置とマルメラードフの自負を表す、この場の解釈のために重要なところである。しかし他国の身分・階級は難訳の要素として知られる。魯庵がここでロシアの事情を二葉亭に確認したのは当然であろう⁹。しかし、この引用部はかなり複雑な要素をもつ難訳箇所となっているのもう少し詳しく見る。第二文に *I belong to the tchin.* とあり、その、イタリックスで発音を表記されたロシア語を含む箇所を、魯庵は「身分ある者で」と訳している。ロシ

ア語の **чин** は、官位・官職全般を意味し、**чиновник** と派生すれば「官僚・役人」となる。この語を「身分」と訳したのは簡潔で要を得た魯庵の名訳と評価できよう。

ところが、この部分のロシア語原典をみてみると、下のようである。

Сам всегда уважал образованность, соединенную с сердечными чувствами, и, кроме того, состою титулярным советником. Мармеладов -- такая фамилия; титулярный советник. Осмелюсь узнать, служить изволили?

[私はいつだって細やかな感情を伴う教養に尊敬を払ってきました。おまけに、私は九等官（「ティツリヤールヌイ、ソベツトニク」）でございまして。マルメラードフ——こんな名前ですが、九等官（「ティツリヤールヌイ、ソベツトニク」）で。あえてお訊ねしますが、やはりお勤めでいらっしゃる?】(Ч.1-II)

驚いたことに、原典に **чин** という語は無いのである。原典では、官位名を名乗り、自分の姓を述べてからもう一度官位名の念を押す、という構造になっている。ウィッシュォーは、その、官位名のくりかえしを一度にし、その代わり、**чин** を有する者だ（卑しからぬ身分の者だ）、と言い換えているわけである。上述したように身分・階級は難訳の要素であるため翻訳に工夫を凝らす必要があるのだが、ウィッシュォーが、その「説明的訳語」として、英語ではなくロシア語を、しかもテキスト外から持ち込んでいるということになる。かなり不思議なやりかたである。

魯庵・二葉亭の協同訳に話をもどすと、ここで魯庵は二葉亭にロシアの官位制を照会しているはずだが、二葉亭には「マルメラードフの職名である a titular councillor という官位はどういうものか」「**чин** (*tchin*) という語はどういう意味か」というかたちで独立した質問をしているのであって、魯庵が *tchin* という語のある英訳テキストを二葉亭に示し、二葉亭が原典との照応を見る、というような協同形態は少なくともこの時点では無かったことが推測できる。

- 3) 五時過ぎでしたツけ、或る時ソーネチカ（ソーニヤの事也）が不意に「バーヌース」（白毛織^{うはぎ}の上衣）を着て出掛ける所を見た。（巻之一、第二回）

It was then past five o'clock; I saw Sonetchika rise, put on her bur-nous, and leave the house. (Part I, Chapter II)

ソーニャを、父親マルメラードフが満腔の愛情をこめて指小形（普通、小さい愛しい子供へのよびかけ）ソーネチカ Сонечка でよぶ。これもウィッショー訳に残されたかたちをそのまま踏襲し、（ ）に説明を注記している。

4) 此時^{ひとむれ}一群の百姓は^{がやがや}家^{うち}から飛出した。大方は赤と青の「シャツ」の上に^{そでなし}無袖の「スモック、フロック」（粗布で裁ちし外套）^{そふ}を着て、勿論^{あひど}諫泥れてゐたが、手に「バラ、イカ」（三味線の類）を持ってどなり散らしてゐた。（巻之一、第五回）

All at once a number of peasants came noisily out of the house, the greater part clad in red and blue shirts and sleeveless smockfrocks, tipsy, of course, and some singing, with valalaikas (Russian guitars) in their hands. (Part I, Chapter V).

3) の「バーヌース」4) の「シャツ」「スモック、フロック」「バラ、イカ」、全てウィッショー訳の形（英訳における訳語）を「 」で踏襲している。ウィッショーが英語に訳した（ロシアの服装をイギリスの服装に置き換えた）「シャツ」「スモック、フロック」と、ロシア語のままアルファベット表記した「バラ、イカ」と、魯庵の扱いは基本的に同じで、英訳外からの情報は、（ ）に入れて注記としている¹⁰。

これまで見てきたように、魯庵の翻訳はあくまでも英訳を底本としており、英訳だけでは解釈が出来ない場合にのみ、魯庵は二葉亭に問い合わせを行っている。その多くはウィッショーがロシア語を英訳テキストに混ぜ込んでいる箇所であった。二葉亭は問われる質問に答え、単語を問われれば辞書的に、また事象を問われれば百科事典的に解説しているのみである。ただし、魯庵が英文では意味がとれないので原典の表現を確認したい、と考えたであろう箇所もその形跡が散見される。こうした場合は、二葉亭は求めに応じて原典の該当部分のテキストを確認し、その直訳を説明していると考えられる。

次に引用するのは、殺人を犯したのち気力／体力を使い果たして自室に倒れ込み、讒言を言うラスコーリニコフの意識の混乱ぶりを見て、下婢ナスターシャが「血だよ！」と宣告する、それを聞いたラスコーリニコフがいっそう動

顛する、という場面である。続く文脈を追ってゆけば、血が頭に上っている、出口を失った血が煮えて譫言や幻聴をもたらすのだ、という意味にとれるのであるが、意味を測りかねた魯庵がロシア語原文を確認していることが訳文から見て取れる。

『血だよ！』とナスターシャハ自分に呟く様に曰た。(原文 “^{エート クローキ}Eto krovi”
英訳 “^{ハ シス イズ セ ブラッド}This is the blood” とありて何れも「血だ」と解すべく「血の故だ」
即ち「^の逆上せてゐるんだ」とも解すべし此兩義に通ずる故にラスコーリニコフは聞き誤つたのだ)

『血だ！何の血だ！』顔蒼ざめて壁に向つて^{をめ}喚いた。(巻之一、第九回)

翻訳の主体性は完全に魯庵のものであり、訳文の日本語は魯庵の文体であることが言えるようになってきた。ここで、魯庵の文体の特徴を、「巻之一」最大の山場とも言える高利貸の老婆殺人の場面で見ることによって本節のまとめとした。

テキスト② 高利貸殺人の場面

背が低いから^{なた}鈍の落ちたは丁度「シンシプツト」(前頭部)で片手^{しちもつ}に質物を握り片手に頭を押へたまゝ、聲をも立てず^{たふ}べたべたに^{たふ}殞れかけた。斯うなるとラスコーリニコフの勇氣は忽ち十倍し鈍を取直して^{まっかうみちん}眞向微塵に二度まで打下すと^{はとばし}鮮血泉の如く^{めだま}迸つて死^{なり}躰はどたり轉がつた。眼球は飛出さんとし顔は^{なり}ゆがみ形に變じて全く死相を現じた。(巻之一、第七回)

緊張感とスピードのある優れた翻訳で、ことに、小さい老婆が一撃を受けて床に「^{たふ}べたべたに^{たふ}殞れかけた」、ついに完全にこたされた物体となって死体が「どたり轉がつた」と、倒れる、というところを見事に全く違う擬態語と動詞をつかつて表現し分けたところなどは、語彙が豊富で表現力のある、漢文と生きた口語のどちらにも練達した魯庵の面目躍如であろう。紋切り型の殺陣に陥らず、思想にそそのかされて実際に一線を越え、血まみれの殺人に手を染めた瞬間、ラスコーリニコフの眼にとびこむ気味の悪さを十分に実感的に伝える訳文である。筆者個人は、現在まで出そろった十数種の日本語訳のなかで魯庵訳を超えるものは無いと考える者である。

ただし、ドストエフスキーの文体はもっとしつこい、あとからあとから細部

が付加される粘っこいものである。太字で引用した部分（第二文、第三文）を試訳してみると「（前頭部に一撃を受けた老婆は）一声叫んだ、しかしその声はほとんど聞き取れなかった、そして、突然全身が床に崩れ落ちた、しかしそのまゑに、頭の方へ両の手をかりうじて上げていた、その片方の手には、まだ「質草」を握りしめ続けていた。」というように、まず大づかみな動きが示され、そのあと、ディテールが次々意識の中について入ってくる。そのあたりの構文は、同じ印欧語で付帯条件がぶらさげやすい英訳のほうが原典に近いと言えるだろう。

魯庵の訳文は原作者の文体を伝えるものではない、それは、文体が作者の個性をあらわすものではなく、漢文崩し、和文崩し、雅俗折衷文体など、文藝言語の中の選択であった明治半ばにおいてはある意味当然であった。原文の構造が透けてみえる「透明な翻訳」が希望される現代においては評価は分かれるかもしれない。

Удар пришелся в самое темя, чему способствовал ее малый рост. **Она вскрикнула, но очень слабо, и вдруг вся осела к полу, хотя и успела еще поднять обе руки к голове. В одной руке еще продолжала держать “заклад”.** Тут он изо всей силы ударил раз и другой, всё обухом и всё по темени. Кровь хлынула, как из опрокинутого стакана, и тело повалилось навзничь. Он отступил, дал упасть и тутчас же нагнулся к её лицу; она была уже мёртвая. Глаза были вытаращены, как будто хотели выпрыгнуть, а лоб и все лицо были сморщены и искажены судорогой. (Ч.1-VII)

The hatchet struck her just on the sinciput, and this was partly owing to her small stature. **She scarcely uttered a faint cry and collapsed at once all in a heap on the floor; yet she still had strength to raise her arms to her head while one of her hands continued to clutch the pledge.** Then Raskolnikoff, whose arm had regained all its vigour, struck two fresh blows with the hatchet on the crown of the old woman's head. The blood spurted out in streams and the body rolled heavily over. At that moment the young man drew back; so soon as he beheld his victim stretched on the floor he bent over her face; she was dead. The wide-open eyes seemed about to jump from their sockets, the

convulsions of death had given a grimacing expression to the countenance. (Part I, Chapter VII)

sinciput [頭蓋骨の前額片の頭頂部側の継ぎ目部分]という解剖学用語と言ってもよい単語については魯庵は特に調べているため註を加えていること、原作では、第一の打撃についても、第二、第三の打撃についても、下線部の *обухом* (峰打ちで) という単語を繰り返しているが、英訳で脱落したため魯庵訳にも無いこと、を指摘しておく。『罪と罰』全編の終わりの方で、ラスコーリニコフは、「あのとき、斧を振り上げたとき、切り裂いたのはばあさんじゃない、自分の方なんだ!」とソーニャに告白する、その時読者はこの *обухом* を突然思い出す(斧の刃は、振り上げたラスコーリニコフ自身に向いていた!)のであるが、後半に魯庵の訳筆が及ばなかった以上この問題は指摘にとどめる。

しかし、頭蓋を打ち割られた老婆から血の海が広がる、ラスコーリニコフが血に染まった斧を痙攣的に水で洗う、ナスターシャに「血だよ」と言われてラスコーリニコフが惑乱する、といった部分の訳文の印象の強さもあり、現在まで、日本の読者には、「峰打ち」(鈍器で殴った)という表現は届いていないのではないか。ざっくり断ち割られたイメージで訳された魯庵訳は塗り替えられていないのではないだろうか。

『小説 罪と罰』「卷之二」

「卷之二」に入ると、魯庵の翻訳態度に明らかな屈折／変化がみられる。あるいは「卷之一」翻訳の過程でウィッショー訳の特殊性に気づき、英訳を一辺倒に信用することに慎重になった、と考えられるかもしれないのだが、原典(ロシア語原文)を参照する(二葉亭に協力を求める)度合いが明らかに高まっているのである。英訳のみで解決できない場合の必要に駆られての原典ではなく、まず底本としての点検(校合)をする姿勢が「卷之二」に入って新しく現れた。

それに応じて二葉亭の方でも関与の度合いを次第に強めてゆく様子がうかがえる、と筆者は考えている。本節を通じてその様子を分析・考察してゆく。

“Boje moi” の振假名に「ボジュ、モア」とあるは「ボージェ、モイ」なり。又例言中原作家の名氏 Fedor の振假名に「フエドール」とあるは「ヒヨー

ドル」なり。以上は印行成りて後長谷川氏より注意せられしもの^{こゝ}爰に之を訂す。(巻之二、例言)

上の「例言」(まえがき)からは、「長谷川氏」(二葉亭)が魯庵の訳文を翻訳中には見ておらず、出来後に、^{しゅつたい}献本をうけて初めて読み幾つかの指摘を行った、ということも傍証されるのであるが、ここに挙げられている二葉亭の誤訳指摘が「巻之二」翻訳にあたって魯庵がまず留意した点となるので、かなり細かい作業となるが確認しておこう。

まず、ロシアの固有名詞の読み方である。「Fedor の振假名に「フエドール」とあるは「ヒヨードル」なり。」というが、現在では普通フョードルと仮名書きされるドストエフスキーの名は、ロシア語では Фёдор と綴られる。ロシアの音価としては別個の ѣ [イオー] と е [イエー] が英アルファベット転記とともに e とされるため、また、長音はアクセント母音の位置に左右されるため、確かにウィッショ어의転記 Fedor は、「フエドール」とも「ヒヨードル」ともとり得るのである。しかし同じ名をガーネットは Fyodor と転記しているのであり、その方が原音を復元するのは易しい、つまりウィッショ어의転記はやや難解であることは確かである。そのほかの主人公の名もウィッショ어転記は、Pulcheria (ラスコーリニコフの母親プリヘーリヤ)、Euxodia、(同妹アウドーチヤ)、Porphyrius (判事補ポルフィーリイ)、Looshin (妹の婿ルージン)、と、仮名書きにおこそうとする際に原音とのずれが生じやすい。なかには原音を読み取ることの不可能なものもある。しかし、魯庵は、「巻之二」翻訳の過程では、ロシアの固有名詞についてはいちいちまず原典のロシア語を確認しており、その結果、登場人物の名前(仮名表記)は全てロシア語の発音をかなり忠実に写している。

魯庵が気を遣ったのは人物の名前だけではない、例えば次のように、雑誌名などもロシア語原典を確認している。

しかし「エジエネגיעリーナヤ、レーチ」(^{雑誌}の雑誌)に投書したんで「ペリオジーチエスカヤ、レーチ」ぢやアない』(巻之二、第十九回)

英訳 Hebdomadal Word, Periodical Word

露語 Еженедельная речь, Периодическая речь

面白い例を一つ挙げておこう。ソーニャが下宿しているのは、貧しい仕立屋

の大家族が借りている部屋であるが、その表札に「裁縫師カペルナウーモフ」(第十八回)と書かれている。これは、実は英訳者ウィッシュョーのミスで、英訳では“Rapernasumoff, tailor”(Part III, Chapter IV)と誤記されているのである。しかし、ここも原典(Капернаумов портной (IV))通り間違いなく日本語になっている。魯庵が、疑問の余地も(普通)無いようなものに至るまで、ロシアの固有名詞は必ず確認を取っていることが確実にわかるところである。

次に、ロシア語の慣用句、特に、ロシア人の口をつく間投詞についてである。「“Boje moi”の振假名に「ボジュ,モア」とあるのは「ボージェ,モイ」なり。」であるが、Боже, мой! (ボージェ, モイ!) すなわち My God! にあたるしばしば口をつく表現について。これを、「卷之一」では下記1)のように、「卷之二」では2)のように、ルビによる発音表記を訂正した、という。どちらも底本(英訳)で“good heavens!”とあり、“good heavens!” (“Great heavens!” “Heavens!”なども)を、魯庵はその都度 Boje moi とアルファベット表記をして「卷之一」では「ボジュ モア」と、「卷之二」では「ボージェ モイ」と仮名ルビをつけており、それは作中数十回もくりかえし出てくるこの間投詞について例外は無い。

- 1) だがよ………^{ボジュ モア}Boje moi! (「八幡!」とか「南無三!」とかいふ様な意義にて何かにつけ魯西亞人が口にする間投詞也) 家へ歸て、役目に有附いて給料を取る様になつた事を家内に話した時にハ、それハそれハ僕^{もてな}の欸待され方ハ無かつたネ』(卷之一、第二回)

волилсЯ домой, и как объявил, что на службу опять зачислен и жалование получаю, что тогда было!

But, **good heavens!** What a reception they gave me at home when I announced that I was reinstated in the service and about to receive a salary.” (Part I, Chapter II)

- 2) 『^{ボージェ モイ}Boje moi!』とプリヘーリヤ、アレキサンドロウナは^{さけ}號んだ。(卷之二、第一五回)

—Боже мой!—вскричала Пульхерия Александровна.

“**Good heavens!**” cried Pulcheria Alexandrovna. (Part III, Chapter I)

- 1) は、魯庵訳の全体を通じて“Boje moi”が初めて登場する部分なので、()

に入れて注釈が施されている。ところが、原典のロシア語を点検すると1)の原文には、*Боже мой!* という「魯西亞人が口にする間投詞」そのものは無い。引用部を試訳すると「家へ帰って、再び役職を得て俸給を戴くようになったことを、話しました途端、まあいったい何が起こったとおぼしめす!」となる。話者(マルメラードフ)が、最後を聞き手に投げかけるように「まあいったい——!」と叫んだところに詠嘆を読み取ったらしいウィッショーが、“But, good heavens!”と間投詞を付加して盛って「意識」した箇所なのである。すなわち、この部分を翻訳する上で魯庵は「英語では“good heavens!”と叫ぶところ、ロシア人はどう言うのだろうか」という一般的なかたちで照会したのであろう。そしてその際二葉亭も一般的に答えた。また、“*Boje moi*”は“*Боже мой*”をアルファベットで表記した転写であるが、ロシア語を知らない魯庵が誤ってフランス語風に読んでしまい、二葉亭は、「卷之一」の刊行後に魯庵の誤解に気づいて訂正したのであり、二葉亭の返答が書面で行われたこともうかがえる。一方、ロシア語がアクセント位置までも正確に書き取られるようになっている「卷之二」では、二葉亭と魯庵が同席して二葉亭が何度も発音してみせたのであろう。

そのほか、「卷之一」の1)に続くマルメラードフの物語りの中で、「初めての給金を持って帰宅してその金を妻に握らせた時、妻が、この私の頬をつつき、なんと“a dear”と呼んだんですよ、」——というところで、魯庵は「本当は何と呼んだんだろう」と探求心をおこしたのであろう、訳は次のようになっている。

家内ハ大邊に喜んで僕の頬べたを突ついて「マリヤアボチカ」(「坊や」
とか「好い坊や」^{ことば}とか云ふに似た詞で極々親愛なる間に行はる)と呼んで
此見る影もない者に向つて、「ほんとうにまア貴夫^{あなた}のおいとしひ事」と言
ひました(卷之一、第二回)

また、こうした用心深さの延長としては、“valalaikas (Russian guitars)”のように、英訳テキストに説明的に用いられる Russian という語にゆきあたると、英訳者の説明と察し、二葉亭にその内実を相談していることも指摘しておく。次に引用するのはポルフィーリイがラスコーリニコフの挙動に不審なものを感じてそこを突こうとする演技的場面である。

Indeed! In a completely raving state?" remarked Porphyrius, with the toss of the head **peculiar to Russian rustics.** (Part III, Chapter V)

「ロシアの田舎者に特有な頭の振り方」という実態を知ろうと原典を照会すると、「どことなく女のような身振りで」頭を振ると書かれていた（引用で、それぞれ太字にしたのがその部分）。

И неужели в совершеннейшем бреду? Скажите пожалуйста! – с **каким-то бабьим жестом** покачал головою Порфилий. (Ч.3-V)

女といっても **женщина** という中立的な単語ではなく洗練されない田舎の素朴／粗野な女を指す **баба** という語が使われているが、そこを踏み込んで「田舎女」と訳語をあてるのはかなり思い切った訳だろう。魯庵は英訳と原典の双方を練り合わせて次のように訳出した。

『^{ほんと}眞實? ふうむ、丸で気が狂ツて?』とポルフキーリイは魯西亜の
田舎婦人の特有な首の振方をして云ツた。(卷之二、第十九回)

このように、英訳の解釈のため原典の該当箇所を参照し両者に相違があることに気づいた場合、魯庵は訳語にロシア語のニュアンスも折衷している。訳語から逆に、この箇所はロシア語原文と英訳と両方見た上での訳語づくりであったことがわかるのである。このような訳語は重訳であり協同訳である魯庵訳の特徴と呼べるだろう¹¹。

個々の訳語に続き、文体を検討する。二葉亭も独立した翻訳・創作がある一流の作家でありロシア文学者であるが、「卷之二」の翻訳も翻訳者としての主体は魯庵であり、魯庵による英文和訳が基本である。魯庵の訳文はいわゆる透明な直訳体ではなく、こなれた日本語になっているのだが、それでも「原文」の構文が訳文にあらわれている箇所を探し出して検討すれば、「原文」が英訳であることははっきりわかる。いくつか具体例をあげてみよう。

[...] 前夜恰もそれと同じ様な妙齡婦人に始めて逢ツた事を主張してゐる最中——見よ見よ渠女自身は訪問した！（卷之二、第十八回）

[He had just now been] declaring that he had seen the identical young

person for the first time the night before, when, lo and behold, she herself called! (Part III, Chapter IV)

[...] упомянул, что видел эту девицу в первый раз, и вдруг она входит сама. (Ч.3-IV)

上の引用は、ラスコーリニコフが、ソーニャとはつきあいはなく、昨夜マルメラードフの臨終に駆けつけたその姿を初めて見たのだ、と説明している時、そのソーニャ本人が訪ねてきたという場面であるが、原典では突然彼女自身が入ってくるのではないか、というだけの描写で「!」符号も無い。「見よ見よ」というのは“lo and behold”という英文の表現の訳である。また、次の例のように、ひとつの台詞をふたつに割る、など意味にはかかわりのない箇所も挙げておこう。

『僕ア思ふナ』と愕然としてラスコーリニコフを凝視めながらラズミーヒンは云つた、『一人々々で御飯^{うぜん}を喰べるッてエ事アない。(巻之二、第十八回)
“I suppose,” exclaimed Razoumikhin, looking at Raskolnikoff with astonishment, “You are not going to dine alone? (Part III, Chapter IV)
—Да неужели ж вы будете и обедать розно? — закричал Разумихин, с удивлением смотря на Раскольникова, (Ч.3-IV)

次の例は判事補ポルフィーリイを前にして、年老いた母の存在をほのめかし、女ですから心配します、というように、いわば同情を買おうとしたラスコーリニコフが、女という単語を複数形で(“женщины”／“women”)言ったために、なんだか一般的な言い方になってしまったと気づく場面である。ロシア語では「どうして“женщины”と〔複数形で〕言ってしまったのだろうか?」とあるだけであるが英訳で説明的に加えられた“in the general sense”が魯庵の訳に反映している。ちなみに“I ought not to have said”を「と言わなかった筈だが」としたのは魯庵の誤訳であろう。

『廣い意味で「婦人^{をんな}」と云はなかつた筈だが』(巻之二、第十九回)
“I ought not to have said ‘women’ in the general sense.” (Part III, Chapter V)
—Зачем сказал: “женщины”? (Ч.3-V)

下の引用で、魯庵は自然な日本語にかなり「意識」したつもりの箇所（ ）で注記して、「原文には「魚の如く乾いてる」とあり」と言っている。しかし、魯庵の言う「原文」は英訳であり、魚の如くという比喩は英訳にだけあったものだった。原典では“Горло пересохло!”（喉が渴いてからからだ!）である。

『茶を飲まう。咽喉がひつつく様だ（^{のど}【原文には「魚の如く」】）』（卷之二、第十九回）

“Do let us have some tea! We are as dry as fishes!” (Part III, Chapter V)
— Да дай хоть чаю-то! Горло пересохло! — (Ч.3-V)

次の引用は、おまえは人殺しだ、という部分を強調するため、英訳で強調の倒置構文に変えられ、それを魯庵が訳文にさらに圈点を付して引き継いでいる。

『人殺しとはお前だ!』（卷之二、第二十回）

“It is you who are a murderer!” (Part III, Chapter VI)
— Ты убивец, (Ч.3-VI)

ロシア語では、同格の「～は～だ」という構文の場合、be 動詞を用いないかわり、ты (you) という主語と убивец (murderer) という単語の間に大きな「間」をとるため、この短文には宣告のような衝撃がある、その強い効果をウィッショーは英語において強調の倒置構文として訳出したのであり、魯庵は魯庵でその強い効果を（当時の）日本語の強調手段である種々の圈点を派手に付して訳出したわけで、「原文のインプレッションを伝える」¹² リレーの上で三言語の特徴が出た箇所と言える。

次の例は、数少ない魯庵の誤訳例でもある。ロシア語で「ソーニャは自分のアドレスを告げ、その際に赤くなった」という平易な文をウィッショーが “not without a blush” と、二重否定で英訳したため、魯庵がそれを訳し損なって、下線を引いたように、顔を赤らめもせずにアドレスを告げたことになってしまった。

ソーニャは^{はなじろみ}羞明もせず其宿所を告げ、三人諸共に出かけた。（卷之二、第十八回）

She gave him her address, not without a blush. (Part III, Chapter IV)

Соня дала свой адрес и при этом покраснела. (Ч.3-IV)

魯庵は相当に難しい単語を正しく訳しており、複雑な思想や一九世紀の科学哲学なども読解して再生するだけの英語力を有しているが、どういう理由か否定表現に弱く、誤訳は上の例に類した否定、特に二重否定に絡んだものに集中している。既に述べた“I ought not to have said”の誤訳のほかにも以下の三例を挙げることができる。特に最初のふたつの引用は登場人物の内面の表出にかかわる重要な箇所の誤訳と言えよう（下線部が誤訳）。

Allow me, young man: can you or *dare* you fix your eyes on me and deny that I am a sot?” [お若い方、あなたは私を直視して、私が酔っぱらいではないと言えますか、言う勇氣をお持ちですか。] (Part I, Chapter II)

先生、僕を^{しき}荐りに^{みつ}凝視めるネ、僕更に酔たん坊でない（巻之一、第二回）

“Well! if I am wrong,” exclaimed he presently, “if man is not necessarily a coward, [まもなく彼は叫んだ。「もし俺が間違っていて、もし人間が必ずしも臆病者ではないというなら] (Part I, Chapter II)

自己の考慮が間違つてなけりやア——若し自己の思ふ通り人間がくだらなくなけりやア（巻之一、第二回）

“Oh, yes, I hope, mamma, that neither you nor Dounia will think that I should have refused to come to see you to-day, or was waiting for you to call on me first.” [そうそう、母さんもドゥーニヤも、今日僕がふたりに会いに行きたくなくて、ふたりの方から訪ねて来るのを待っていたなんて、思わないでほしいな] (Part III, Chapter III)

あア、左う左うお母さん、慈母も^{いかん}ズーニヤも今日僕が慈母に逢ひに征くのを嫌ツたと思ツちゃア不可。僕ハ一番駈に來て下さるのを待て居たンだから左う思つて下さい（巻之二、第十七回）

「巻之一」には見られず、「巻之二」に現れた現象として特筆すべきは、「巻之二」には、魯庵の訳文の「原文」がウィッシュー訳に見つからない、すなわ

ち、英訳の際脱落していた部分が補完された上で日本語訳がなされている、という箇所が存在することである。すなわち、おそらくは二葉亭によって、まず、ウィッショー訳が点検（原本との対比較勘）され、原典との異同を正されたもの（書入本及びノート）を魯庵が翻訳の底本としているのである。

これまで見てきたように、「巻之一」翻訳中は、魯庵はまだ英訳を底本として信頼しており、ロシア語原典との照応を確認するということはしていなかった、と考えられる。ふたりのやりとりは、一般的なロシア語およびロシアのレアリアについての質問と答というかたちであったろう。しかし「巻之二」に入ると二葉亭への照会も原典の場所を指定して、原典と英訳のテキストを具体的に共に読み合わせるようになったとみられ、ここまでくると「協同訳」という呼び名に相応しい。

英訳の欠落部分（二葉亭によって補完されたとみられる箇所）は「巻之二」の、特に後半に集中している。誤訳や意識と区別の難しい細かい脱落を除いて、かなり大きな範囲で欠落が補われた部分は四カ所挙げられる。

原典のどういう場面をウィッショーが訳さなかったか、——脱落箇所の内容を検討することは、ウィッショーのドストエフスキー／『罪と罰』解釈に関わる問題で、これについては最終的な魯庵の『罪と罰』解釈とともに最後に再検討することとするが、ここでまず、どういう所が英訳されなかったか、大まかな特徴を見てみよう。

欠落部 1) はラズミーヒンとゾシーモフの会話、2) はラスコーリニコフの母と妹の会話、3) と 4) は近接する相当な量の脱落であるが、これはラズミーヒンとポルフィーリイの会話である。ポルフィーリイの事務所で彼とラスコーリニコフ、ラズミーヒンの三人が犯罪や罪について三つどもえの大議論をする場面のうち、ラスコーリニコフとポルフィーリイのやりとりだけを訳出しラズミーヒンが口を挟んでポルフィーリイとやり合う部分を抜かしているのであるから、英訳者が、ラスコーリニコフが登場しない場面、彼の直接参加しない会話を、重要性が低いと判断して省略したことになるろう。

魯庵の訳文の当該箇所には特徴がある。英訳がその部分は存在しないのであるから、英語の構文や英語表現にひきずられることは当然ながら無く、結果として、他の部分に比べてロシア語の構文や表現がより直接に維持されている。レアリアも「 」に入れて保存されたレアリアはすべてロシアのものでイギリスのものは無い。（ ）の中の注釈は魯庵自身になじみのないロシアのレアリアの説明であるから、より説明的に詳細である¹³。

1) […] …どうせ晩かれ早かれ左うなツて、君の欲しが^{はね おとん}る鳥羽蒲團や何や斯^{なに か}を君が見付け出す都合になるんだ。ポルト酒を飲んで、苦^{すつぱり}労が悉皆抜けて、結構な菓子や旨い物を喰^{くら}ツて、夜になりゃ「サモワール」(湯沸^{したく}し)の準備をして、「レジエンカ」(^{日本の舊と全様にして其上に寝る事}も出来るもの也置に農夫の家に在り)に寝て「カツアウエーカ」(^{温かな半}露^のの類)を着てゐられる。[この前まで。原典 ㉒.3-I, 九十九語。() による註は訳註] (巻之二, 第十五回)

You are sure to come to it sooner or later, and there you would find your feather-bed, and whatever else you want. Here you would be in port, secure from all agitation, and have excellent cakes and savoury dishes, your samovar ready at night, and a warming-pan for your bed. (Part III, Chapter I)

2) […] まアこ、はどうしたツてんだらう、街衢^{おうらい}のくせに丸で「フォルドチカ」(^{新鮮なる空気を取るため窓の戸に股けた穴にし}て日本の雨戸に似たるもの、是は魯國のみに覆る)のない部屋にゐる様だ! […] [前後原典 ㉒.3-IV, 四百二十二語。() による註は訳註] (巻之二, 第十八回)

3) 『また空滑稽^{そらツとば}けて彼奴^{あいつ}を嚇してやらう』(^{原文には「彼奴にもラザロを歌はせけりやならぬ」とあり是れ魯西亞の俗語にて「愚鈍を覆す」と云ふ意味なれど前後を参照して爰には上文の如く譯す})と蒼醒めて心をどきつかせながらラスコーリニコフは心中に思ツた、(以下原典 ㉒.3-V, 五十七語。(巻之二, 第十九回)

4) […] 人生の秘密は僅に二頁の中に印刷してある……』
『そっら、向ふ^み不見に饒舌^{しやべ}り立ッて太鼓をたゝくナ! […]」
若し聞きたけりやア「イワン、ウエリーキイ」(^{饒舌})の高さが三十五「サアジエン」あるばツかりで貴様の^{まつげ}瞼毛が白いんだといふ事を直ぐ説明してやろうか? […] (前後原典 ㉒.3-V, 六百二十二語) (巻之二, 第十九回)

「」や()に目に見える形で原語や註が示されている以外にも、ロシア語からの直訳であるがゆえの訳を指摘することは可能である。4)で「僅に二頁の中に」(в двух страницах)とあるが、ロシア語で数字の2には「ほんのわずか」しかないことを示するのであって具体的な数ではない用法がある。ウィッショーはこの用法を知っていたとみえ「ポルフィーリイの家はここから二歩のところにある」(Да чего тут, идём сейчас, два шага, наверно застанем! [なんだ、

今すぐ行こう、二歩のところだ、きっと在宅だ！] 4. III - IV) というところは “in a stone's throw” (Part III, Chapter IV) と置き換えて英訳してあり、魯庵訳で「彼奴^{きやつ}の家は直ぐ其處^{うち}だ。石が届く處だ。」(第十八回) となっている。また、「饒舌^{しゃべ}り立って太鼓をたゝく」という表現も、べらべら舌を動かす／空疎なおしゃべりをする、という意味のロシア語の動詞 барабанит が、語幹 барабан (太鼓) に小太鼓を打ち鳴らす原義が見えることからの凝った訳語になっている。

英訳不在のこのような箇所は、二葉亭が魯庵にいわばつききりで共に原典を講読しているに相違ない。本節の最初に述べたように「卷之二」に入ると魯庵の翻訳態度に屈折／変化がみられ、必要に駆られての原典参照ではなく、まず底本としての点検（校合）をする姿勢が「卷之二」に入って新しく現れた。この「協同訳」への傾きは「卷之二」の中でも後半に入ってから次第に強まってゆき、それに応じて二葉亭の方でも関与の度合いを次第に強めてゆく。魯庵の長男の回想は若き日の二人のこの「協同訳」の様子を生き生きと書きとどめている。

『罪と罰』の翻譯を二葉亭に聲色まぢりで聞かせながら、父は夢中になつて手眞似や表情で感激し、夜の更くるのも知らなかつた。さうして遂には二葉亭も興奮して、二人でラスコールニコフやナターシャ [ナスターシャ] の聲色のかけ合が始まるという騒ぎは、父がいつも懐かしげに語るころ（内田巖「父魯庵を語る」¹⁴）

魯庵は、明治三八年に、レフ・トルストイ『復活』をふたたび二葉亭との協同を前提に開始する。この翻訳の過程で交わされた二人の書簡は散逸せず二葉亭全集に収録されている¹⁵。往復書簡において、魯庵は知らない事象、腑に落ちない表現を英訳から逐一書き出して（書簡一通に質問はおよそ十問前後）、自分の推論や仮の訳文を付した質問票を二葉亭に送り、二葉亭はそのいちいちを原文に当たった上で、補足したり解説したり試訳を示したりして返送している。しばしば二葉亭による図解が試みられ、その内容も、ロシアのレアリアだけでなく、陪審員制度による裁判方法の詳細な説明や、また、それぞれの主人公の心理を立ち入って説明するほとんど文学講義と言ってもよいものに至る。また、手紙から二人がほぼ毎日会って共に作業しており、書簡はそれを補うものであったこともわかる¹⁶。

重訳『罪と罰』の「イムプレッション」

全体として、『罪と罰』は魯庵の翻訳によりどのくらいその「原文のイムプレッション」を伝えられたのだろうか。魯庵の訳は、時代的に突出して早いというだけで、やはり直接訳が出た後は乗り越えられてしまったものなのか、それとも、ロシア文学の翻訳としてこの重訳はいまなお評価できるものなのだろうか。

『罪と罰』は犯罪（推理）小説としても、社会小説としても、精巧に仕組まれた優れたリアリズムによって成功している。しかし同時に全編を通じ、ルールを踏み越えることが許されるのかどうか、と犯罪を語りながら、それが神の前の罪としての存在を次第に大きくしていくさまが読者に印象される。ソーニャが登場するあたりからその主題は明瞭に姿を現す。彼女は自分の生き方を $\text{грех} = \sin$ と感じている。そしてまた、ラスコーリニコフが自分の行った殺人罪を終始 $\text{преступление} = \text{crime}$ と呼んで語っているにも拘わらずソーニャは「それは грех です」と繰り返し、 преступление という呼称を一度も用いない。作品のエピローグ、遂に自首したラスコーリニコフはシベリアの流刑地で八年間刑に服する、しかし犯罪は罰せられるが、神の前の罪の赦しを求めない彼は、流刑地にあっても葛藤を続けるのである。

この、神、キリスト、罪、そして赦し、といったイメージの重層としてまず挙げられるのは、小説の開始早々、居酒屋でマルメラードフが酔って廻らぬ舌で自らとその家族の生を告白する長広舌で、これから展開する物語を印象深く覆っている。

テキスト③

-Зачем жалеть, говоришь ты? Да! меня жалеть не за что! Меня распять надо, распять на кресте, а не жалеть! Но **распни, судия, распни** и, распяв, пожалей его! И тогда я сам к тебе пойду на пропятие, ибо не веселья жажду, а скорби и слез!.. Думаешь ли ты, продавец, что этот полуштоф твой мне в сласть пошел? Скорби, скорби искал я на дне его, скорби и слез, и вкусил, и обрел; а пожалеет нас тот, кто всех пожалел и кто всех и вся понимал, **он единый, он и судия**. Приидет в тот день и спросит: “А где дщерь, что мачехе злой и чахоточной, что детям чужим и малолетним себя предала? Где дщерь, что отца своего земного, пьяницу непотребного, не ужасаясь зверства его,

пожалела?” И скажет: “Прииди! Я уже простил тебя раз... Простил тебя раз...
Прощаются же и теперь грехи твои мнози, за то, что возлюбила много...” И
простит мою Соню, простит, я уж знаю, что простит... (Ч. I- II)

引用部は、直接には「誰がお前なんか同情するかい」とからかいかけた居酒屋の亭主に向かって言い返しているので、代名詞 ты（二人称単数）は亭主を指す。しかし、この「酔たん坊」の吐く台詞の中には聖書の福音書の言葉がそのまま嵌め込まれている。マルメラーdorfが亭主に、いや同情などされるいわれもない、自分など磔（はりつけ）が相応だ、と言ってみせたあとの、太字で示した “распни, судья, распни!”（十字架に架けろ、裁判官よ、十字架に架けろ!）は、ポンティ・ピラトがキリストを捕らえ、茨の王冠をかぶせてユダヤの民に、さあこれがお前達の王だ、と処断を煽った時に、興奮した民衆が叫んだ台詞そのものである。ロシア語聖書は教会スラヴ語、すなわち、一世紀以降に固定された文章語で書かれている。古典語の要素を多く残した完全な文語で、ロシア人にとっては祈りの言葉（典礼）である。下線をひいた ибо（現代ロシア語では так как [なぜなら]）、приидет（現 придёт [来る]）、дщерь（現 дочь [娘]）などは現代ロシア語としては古語／廃語であるが聖書の記述、祈りの言葉の中で頻出するものである。また чахоточной, земного などの語の使用法にも特徴がある。前者はもともと чахотка（結核）から形成された形容詞であるが、転義的に「脆弱な、下らない」という形容詞として使われ тощий, ничтожный 等と同義語として扱われる¹⁷が、ここでは実際に結核を患う継母について用いている。後者は земля [地] から形成され、転義的に「物質的な、俗な」という意味で用いられ житейский, мирской 等と同義語として扱われる¹⁸が、ここでは「天の父」に対し「地の父」とマルメラーdorfのことを指す時に使われている。どちらも極端に語源通り／原義通りであり、アルカイックな印象を与える。すなわち、く`りご`との中に文語聖書の断片が埋め込まれ象嵌細工のようになっていて、位相の異なるロシア語の重なり合いが眼目と言える。一方で、ロシア語原典に「神」「キリスト」にあたる単語は無い。全ての人を赦し、何もかもわかってくださる方、と一度言ったあとは、「来てくださる」、「赦してくれる」、「おっしゃる」等の主語が全て省略されて出てこない。スラヴ語聖書や祈りの文句に親しんでいなければ文体の屈折からキリストのメタファーを明確に抜き出すことはそう簡単ではない。

You are right, there is no reason why they should. The proper thing is to crucify me, nail me to the cross, and show no pity! **Crucify me, judge**, but pity me as you do it! I will go to meet my punishment, for I thirst not for pleasure, but for sufferings and tears. Do you think, publican, that your half-bottle has given me any pleasure? It was sadness, sadness and tears, that I sought and tasted at the bottom of this flagon; but He who has had pity on all men and sees all hearts, will have pity on us; **He alone is Judge**. At the last day he will come and ask, 'Where is the girl who had compassion on her earthly father, and did not turn away in disgust from the habitual drunkard? Where is the girl who sacrificed herself to an unkind consumptive stepmother, and children who were not her own flesh and blood?' And He will say: 'Come, I have forgiven thee once, once already, and now all thy sins are remitted, because thou hast loved much.' He will forgive my Sonia, He will forgive her, I know. (Part I, Chapter II)

英訳では、主語は文法上省略できず、そして神（キリスト）は He と大文字で書き出される。そのためこの箇所では神（キリスト）について語っていることに誤解の余地はない。また、太字で示した“Crucify me, judge”では小文字で judge, “He alone is Judge”では He であることと呼応して大文字で Judge, 魯庵はそれをふまえて前者を「判事閣下、願くは僕を磔刑に處せよ」、後者を「神は實に唯一の審判官である」と訳し分けて成功している。魯庵の底本が英訳であったことはここでは有利に働いている。

ウィッショーの訳文の中には文体的屈折は見られない。来迎した神（キリスト）が問いかける“Where is the girl…”などは、“А где дщерь…”の持っていた高位の文体が全く感じられずマルメラードフの科白に埋没してしまっていると筆者には思われる。

聖書がふまえてある、と理解した魯庵は訳文をつくるにあたって所蔵の聖書（文語訳聖書）をひきよせた、と筆者は確信している。魯庵は二十歳前後の頃植村正久（1858-1925）牧師の許に出入りし、外人宣教師の説教の通訳をするなど交流を続け、トルストイを知ったのも植村に『我が宗教』（1949）の英訳本を紹介されたことによる。キリスト教信徒とは自負しないまでもかなり長期にわたり真剣にキリスト教を研究していたことは確実だからである。幸いいい

うのか、当時の聖書は文語訳（少なくとも和漢混交文体）である。使用される漢字やその用法にも独特の格調が認められる。魯庵は、福音書になぞらえられていると感じた箇所は、聖書文体で訳し、それは、東京弁のマルメラードフの口調の中にあって、文体的に異質な高位のものの嵌め込みという、英訳によって失われた原典の文体の特徴をかえってよく復元し再生する結果となっている。

御道理である。勿論誰が可愛さうだと思ツて呉れるもんか。正富に言へば僕を磔^{はりつけ}に處し十字架に釘付けにして憐愍^{れんみん}の情を見せぬ筈だ。判事閣下、願くは僕を磔^{はりつけ}刑に處せよ。唯僕を可愛さうだと思ツて呉れりゃア、僕ハ進んで刑罰を受くるに躊躇^{もん}せざる者だ。何故なら僕は快樂^{けらく}を欲せずして寧ろ「苦」と「涙」に渴する者だから。諸君、諸君は此半瓶の酒が僕に快樂を與へたとお考へですか。否、僕が此「フラソコ」の底で味ひ得たハ唯「慘苦」——「慘苦」と「涙」ばかりである。

『諸君よ、神は愍^{すべ}ての人間を憐み、愍^{すべ}ての人心を見て、我々に慈悲^{めぐみ}の眼を垂るものである。神は實に唯一の審判官である。最後の日來らバ神必ず來降して曰ふべし「地上の父に孝を盡しだらしなき酔人を厭はざりし女は何邊^{いづれ}に在るや、邪なる肺疾^{よこしま}の繼母と骨肉ならぬ子供に身を犠牲にせし女は何邊^{いづれ}に在るや」と。神は復た宣ふべし「我は一度、既に一度、爾を免しぬ。爾が愍^{すべ}ての罪は償はれぬ。何となれば爾は多く愛しみたれば也」と。神はソーニヤを救ひ給はむ。神はソーニヤを救ひ給ふに違ない。（卷之一、第二回）

結果として、魯庵の訳文は、直接訳である英訳を飛び越えて、かえって原典に迫るものとなっている。

この、神（キリスト）以外にも、全編を覆うメタファーとして知られるものを翻訳において検討しよう。

『罪と罰』には гроб（棺）という単語が、とりわけラスコーリニコフの部屋の形容として繰り返し出てきて、狭苦しいといえ部屋を棺に譬えるという気味の悪さは原作を読む者に印象づけられる。しかしこのメタファーが、ウィッショー訳においてすでに消失していることが特筆される。次に太字にしたように гроб という単語が出てくる箇所のうち、実際の棺を指すのは、「棺は極手輕

なものですから」という、ソーニャが父親の葬式について知らせる次のものだけだが、英訳に棺 coffin という語があるのもここだけなのである。

--- Гроб ведь простой будет.. (Ч. III- IV)

英訳 The coffin will be a very simple one,

その他の、メタファーとしての гроб を、ウィッショーは看過したか重視しなかった。英訳では 1) sepulchre 2) grave のようにばらばらの単語にしてしまいメタファーとしての統一を失っている。その結果魯庵の訳も棺のメタファーをほぼ完全に見失った。

初めてラスコーリニコフの部屋を гроб そっくりだ、と口に出したのは上京してきた母親だった。

1) -- Какая у тебя дурная квартира, Родя, точно **гроб**, --- сказала вдруг Пульхерия Александровна, прерывая тягостное молчание, --- я уверена, что ты наполовину от квартиры стал такой меланхолик. [お前の部屋は何て不気味なんだろう、ロージャ、まるで棺だよ…突然、プリヘーリヤ・アレクサンドロヴナは息詰まるような沈黙を破って言った…お前が気鬱症になったのも半分は部屋の所為だよ] (Ч. III- III)

英訳 you might as well be in a sepulchre

その不吉な譬えにラスコーリニコフもぎくりとし、母親自身も恐ろしがる。魯庵は次のように訳している。

大変な處にお前はゐるんだネ、ロージャ——丸でお墓にゐるやうだらう
(卷之二、第十七回)

続いて、その場に入ってきたソーニャにラスコーリニコフが言う。

2) Что это вы мою комнату разглядываете? Вот маменька говорит тоже, что на **гроб** похожа. [なんだって僕の部屋を見回しているんです？いまもほら母が、棺に似てゐるって言いましたよ] (Ч. III- IV)

英訳 My mother says herself that it is like a grave.

なぜそんなに部屋を見回すんです？ 今も母が丸で墓場だと云ひました（巻之二，第十八回）

魯庵には石造建築，ことにペテルブルグの建築事情は当然に理解の外であった。ペテルブルグという一八世紀初頭にゼロからつくられた人工都市は，当初は冬宮（皇帝のいる宮殿）より背の高い建物は建築が禁止されていたため，おおよそ二階か三階建ての町であった。それが一九世紀に都市人口が増加すると無秩序な建て増しが繰り返され，上階に行くほど天井も低く，部屋割りも細かく様々な条件が悪くなってゆく，窓も大通りに面するという常識を裏切り中庭にしか窓がない¹⁹，あるいは，極端には，内廊下だけに窓がある，すなわち街路も内庭も見えないという閉じた部屋も生まれた。殊に最上階は積雪対策で切妻屋根になるため天井が斜めに切り下ろされた妙な隙間空間が生まれていた。ラスコーリニコフは下宿料も延滞しながら次第にそういう奇妙な隙間に追いつめられていったのである。実際にペテルブルグの街で撮影されたレフ・クリジャーノフ監督による映画（1970年）では，ラスコーリニコフの部屋がどのような空間と設定されているか，また，階段を下りて外へ出るために主婦の台所口をすり抜けなければならない事情なども観ることができる²⁰。



ゲオルギー・タラトルキン主演『罪と罰』

明治の日本であれば，貧乏学生の住まいと言え，裸の畳の上に置く家具もない殺風景な部屋が想起されたろう。ふすまや障子も破れ，すきま風が吹きさらす。そのため棺というより grave すなわち墓場が優先的にイメージされたのであろう。石棺のメタファーが無視された結果，あるいは逆に無視される要因となったことには，たとえば冒頭の“Каморка ... походила более на шкаф, чем на квартиру.” [部屋というよりはむしろ戸棚に似ていた]」が英訳で脱落していたことも関係する。

モスクワといえども木造建築であり、ペテルブルグに外からやってくる者は、石造建築の内部に都市の貧困が詰め込まれ、生きた人間が石の棺のような空間に押し込められた閉塞感に衝撃を感じたのであり、『罪と罰』は都市文学／生態文学としてペテルブルグの都市の「魔力」をも抉っている。「お前が気鬱症になったのも半分は部屋の所為だよ」という母親の慨嘆は、実際に田舎から到着したばかりの者の直観であったかもしれない²¹。

次に、ラスコーリニコフに宛てて上京に至る経緯を縷々書きつづった田舎の母親の手紙の末尾を引用する。

Вспомни, милый, как еще в детстве своем, при жизни твоего отца, ты лепетал молитвы свои у меня на коленях и как мы све тогда были счастливы! Прощай, или, *лучше*, до свидания! Обнимаю тебя крепко-крепко и целую бессечно.

Твоя до гроба

Пульхерия Раскольникова

(Ч.1-III)

手紙の本文は、「お前〔ラスコーリニコフ〕が幼かった頃、まだうまく廻らぬ舌で私の膝の上でお祈りをとなえていたね、あの頃はなんと幸福だったことか、どうかそれを思い出しておくれ」と結ばれる。そのこと自体が手紙の実用的趣旨からは些か外れる暗示的書き方と言えるのだが、引用で太字にした部分を直訳すれば、「棺に入るまでお前の」。そのあとイタリックスが署名である。ウィッショーの英訳では“I am, yours, while life lasts,”と和らげられ、もはや定型挨拶とうけとった魯庵は手紙全体を候文で訳しこの部分は「目出度かしこ」と結んでいる。

ラスコーリニコフの母親は、別れの言葉 Прощай (Adieu にあたる) と До свидания (Au revoir にあたる) のうち、前者を普段使っており²²、手紙ではもうじき会えることを強調してわざと (ユーモラスに) До свидания と言い換えている。しかし、ラスコーリニコフの部屋を出ようとして Прощай と口に出かかると身震いして、この言葉は嫌いだよ、と До свидания と言い換え、その後は Прощай と言う言葉を封印してしまう。

ポルフィーリイとラスコーリニコフが、ラスコーリニコフの書いた犯罪と超人についての論文を題材に心理戦を行う場面で、ポルフィーリイが、「あなたは神を信じているんですか」という問いかけを行い、ラスコーリニコフは「も

ちろん信じています」と答える。それに続いて次の問答がある。死者ラザロをキリストが復活させたという聖書記述についてであるが、なぜ、とりたててこの挿話が強調されるのか。これも、ラザロの遺体が多く、の聖書絵画やイコンにあるように石室に安置してあり、キリストが起きて出でよと呼びかけるのに応じて石室を出ることで生の世界に還ってくる、このイメージをドストエフスキーが重視しているからに他ならない。

---И- и в воскресение Лазаря веруете? [で、では、ラザロの復活も、信じていると言うんですか]

--- Ве- верую. Зачем вам всё это? [信じています。何でそんなことを訊くんです]

--- Буквально веруете? [文字通り信じているんですか]

--- Буквально. [文字通りです] ²³ (Ч.3-V)



ラザロの復活（作者不詳，石版）

母親も、またナスターシャも、ラズミーヒンも、皆口々にラスコーリニコフにここには空氣が無いから外へ出よ、と説得する。しかし、ラスコーリニコフの部屋から外へ出た母親がドゥーニャに向かって言った台詞は次のものであった。この部分もまた英訳では場面全体が大きく脱落していた（本稿 p.49 の英訳の脱落 2）参照）。

-- ужас у него душно... а где тут воздухом-то дышать? Здесь и на улицах, как в комнатах без форточек. Господи, что за город! [・・・なんてあの部屋は息苦しいだろう・・・ここじゃどこで空氣が吸えるっていうんだろう。こ

こは、通りに出ても、まるで通風窓のない部屋の中にいるようなもんじゃないか。神様、ああんて町でしょう！】(4.3-IV)

[...] あの部屋は大変コンもりしてるよ……あんな處でどうして空気が吸へるもんかネ？まアこゝはどうしたツてんだらう、街衢おうちのくせに丸で「フオールドチカ」(新鮮なる空気を取るため窓の戸に設けたる穴にし、日本の雨戸に似たるもの、是は番國のみに限る)のない部屋にある様だ！(巻之二、第十八回)

厚い石壁に嵌め殺しの小窓しか無いラスコーリニコフの部屋の閉塞感も魯庵は訳出に苦労している。さらにそのあと、太字で示した部分にいたっては訳せていない。ラスコーリニコフの住まいは石の棺だが、そもそもペテルブルグ全体が棺の集積、まさに墓場であるとドストエフスキーは見なして語っていたのであるが。

全編が進行するペテルブルグと対比され、ラスコーリニコフが目にするシベリアの荒涼たる地は、はかりしれない開放感をもつことになる。

ラスコーリニコフの部屋は石の棺であるとともに、ラズミーヒンによって船室に譬えられている。またラズミーヒンは、ラスコーリニコフが熱に浮かされたように惑乱する落ち着きの無さをヴォヤージュ、と呼んでいる。この船旅のイメージも、英訳で多くは脱落するため曖昧になり魯庵訳には無くなっている。

まずラズミーヒンがラスコーリニコフの部屋に入るとき背が高いため頭を打ちそうになって思わず口にする。

-- Экая морская каюта, -- закричал он, входя, -- всегда лбом стучаюсь; тоже ведь квартирой называется! [ちえ、なんつう船室だ—彼は入りざまに叫んだ—いつも頭をぶつけるよ、こんなん部屋だっていうんだからな！](4.2-III)

каюта だけでも船室の意であるが、丁寧に морская (海の) という形容詞が原文にはあった。しかし英訳では “What a cabin this is!” と、ウィツションが余計な形容詞を外している。そのせいで魯庵は cabin を取り換え「何ツていふ小舎だ！こんな部屋でも下宿屋ツてエのか！」と訳した。

また、脱落部分 1) は、ラズミーヒンと医学生であるゾシーモフが交わす会話の後半にあたるが、そこで彼らは、ラスコーリニコフの下宿の主婦について話している。ラズミーヒンが、やもめ暮らしの主婦と懇ろになりかけていたが、ラスコーリニコフの妹に魅了され、あわてて主婦をゾシーモフにいわばおしつけようとするところである。その手練手管を教え込んだ脱落部分に続く箇所を引用する。

Так не всё ли тебе равно -- раньше иль позже? Тут, брат, этакое перинное начало лежит, -- эх! да и не одно перинное! Тут втягивает; **тут конец свету, якорь, тихое пристанище, пуп земли, трехрыбное основание мира,** эссенция блинов, жирных кулебяк, вечернего самовара, тихих воздыханий и теплых кацавеек, натопленных лежанок, -- ну, вот точно ты умер, а в то же время и жив, обе выгоды разом! [多少遅かれ早かれ君どうでもいいだろう? これは、君、羽布団のようなふわふわの始まりで、これはずっと続くんだ! ここにはひきこまれるようなところがある; 行き着く果てなんだ、碇をおろす、波穏やかな波止場、地球のへそ [世界の中心], 世界を乗っけてる 3 匹の魚 [鯨] だ、そして、ブリヌィ, ピローグ, 夕方のサモワール, 静かな吐息, 温かなカツァヴェーカ, ぬくもったレジャンカ: 全てのエッセンスがある——君は往生したようなもので、それでいて生きてるんだ, いいとこ取りだよ] (Ч.3-1)

長い船旅を終えて碇を降ろす穏やかな入り江の港の要素をラズミーヒンは平安の表現としていくつも連ねて用いており、ここでは港のイメージが描き出されている。そこは安楽な羽布団のようにどこまでも柔らかである。「エッセンス」にとけこんでいるものを試訳ではブリヌィ, ピローグ, サモワール, カツァヴェーカ, レジャンカとロシア語をカナ書きにした (意味については魯庵訳を参照) が、いずれも古き良きロシア、西洋化以前のロシア人が親しんだ安楽な生活の要素である。

You are sure to come to it sooner or later, and there you would find your feather-bed, and whatever else you want. **Here you would be in port,** secure from all agitation, and have excellent cakes and savoury dishes, your samovar ready at night, and a warming-pan for your bed. (Part

III, Chapter I)

英訳には「波穏やかな波止場」が“secure from all agitation”となっているのでわかるように一般化され、^{ヴォヤージュ}船旅のイメージはいくつもの比喩的要素が一括りにされほぼ消えている。その代わり、“feather-bed” “have excellent cakes and savoury dishes, your samovar ready at night, and a warming-pan for your bed”などの身の回りの品に説明的な語句（下線部）を補うことで具体性・日常性が強化されている。英訳の調子にひっぱられたのか、魯庵は原典からロシアのレアリアを丁寧^レに拾って（ ）で詳細な説明を加えた。

どうせ晩かれ早かれ左うなツて、君の欲しが^はる鳥羽蒲團^{わぶとん}や何^{なに}や斯^かを君が
見付け出す都合になるんだ。ポルト酒を飲んで、苦^く勞^{らう}が悉^{すつぱり}皆^す抜^はけて、結構
な菓子や旨^よい物を喰^くツて、夜^{よる}になりヤァ「サモワール」（^{あめし}湯^ゆめし^め）の準備^{じゅんぷい}をして、
「レジエンカ」（^{日本の豊と全權にして其上に寝る事も出来るもの位重に貴族の家に在り}日本の豊と全權にして其上に寝る事も出来るもの位重に貴族の家に在り）に寝て「カツアウエーカ」（^{温かな羊}温かな羊^{ひつ}）
を着てゐられる。（卷之二、第十五回）

おかしいのは英訳で唯一メタファーが残っていた太字の部分（Here you would be in port [ここでは君は港^{ポート}の内にいられる]）までもを「ポルト酒を飲んで」と誤訳してその結果失ってしまっていることである。

石棺のメタファーが弱まった／失われた結果、ラザロの復活についての問答が宙に浮いてしまったように、船のメタファーが失われた結果、多くの貧しい家族があらゆる隙間に入り込み雑居しながら行き先の無い漂流をしているペテルブルグの有様をなぞらえる「ノアの方舟」という比喩も十分な衝撃をもたらしていない。

『兇行者を見た者はなかつたか』『^ど何うして見られるもんか。何の事アねエ
「ノアの船」ツて云ふ様^{うち}な家だもの』（卷之一、第八回）

メタファーを感得し、翻訳に再生させるのは確かに難しい。ひとつ見逃すと他も見失いやすい。また、メタファーは本筋に直接関わらない背景や挿話にちりばめられ、複層的なイメージを生成する。したがって、筋を追うのに急で本筋^{ほんしん}に関係のない／意味の薄い箇所を翻訳の際省略したつもりで、結果として、

メタファーとして通底していたメッセージを失うこともある。また、異文化圏の読者のためにレアリアを置き換える翻訳によって失うものもある。原典を直接味わうことなく英訳など訳者の解釈をはさむ重訳においてその危険は常に大きい。こうした、重訳による危うさの増幅も、仲介した英訳テキストとの三点比較を行うことで今回具体的に分析した。

しかし、翻訳『罪と罰』においては、協同訳の要素が、二葉亭と魯庵を有した明治二〇年代にあって最良の結果をもたらしたと評価し得よう。重訳の陥りやすい誤謬もその多くが二葉亭によって回避され、ロシア文学の深い読み込みが持ち込まれ、それが魯庵の達意の文章力によって再生され、日本の青年に強い同時代性を訴えた。翻訳文学が日本文学史の一部となった幸福な例であると言えるだろう。

*本論文は、2013年4月20日、日本比較文学会東京支部例会（東京大学駒場キャンパス18号館）で行った同名の発表に加筆したものである。

*文芸・言語専攻博士課程金谷壮太氏に修辭用語のチェックをお願いした。

註

- 1 明治二一年に二葉亭四迷（長谷川辰之助、1864-1909）がツルゲーネフの作品から『獵人日記』中の一掌編「あひびき」（Свидание）と中篇「めぐりあひ」（Три встречи [三度の邂逅]）を翻訳しているが、これは時代に先駆けた、むしろ孤高の例として知られる。
- 2 慶応四年生まれであるが、同年中に、一月一日にさかのぼっての明治改元が公布された。
- 3 ポー「西洋怪談 黒猫」（明治二〇年 読売新聞連載）、ポー「ルーモルグの人殺し」（明治一九年 読売新聞連載）、ディケンズ「影法師 [原題「クリスマスキャロル」]」（明治二一年 読売新聞連載）
- 4 『丸善外史』にそれは500部だったと書かれているが、「巻之一」は400部しか売れなかった。
- 5 木村毅「解題」明治文学全集 七『明治翻譯文學集』筑摩書房、昭和四七年
- 6 Dostoyevsky, Fyodor, *Crime and Punishment*, translated by Frederick Whishaw, London: Vizetelly & Co., 1886; Chicago: Laird & Lee; London: J. M. Dent & Sons, 1911; London: Walter Scott, 1911; Philadelphia: Running Press, 1996.
- 7 井上健氏より、この英語の慣用句は戦線を指しており、敵の砲火を浴びる戦線突破を要する、というイメージであり、普通は竈（台所の火の元）とは訳せない、とご指摘をいただいた。同氏から、魯庵の英語力について、慣用表現に熟していないのではないかと、とも示唆された。そうであれば、魯庵はおそらくここで

唐突にでてきた“enemy’s fire”が理解できず、二葉亭に原作を確認してもらっているかもしれない。原文（ロシア語）の意味をきき、その上で、溜まった下宿料をとりたてようとするいまや「敵」となった主婦の「竈前」、という苦心の訳文を作ったのではないか。

- 8 ウーロクという音を ou で表現している。ウイッショールはロシア語をアルファベット表記するにあたり、こうしたいわばフランス語綴りを採用している。それをカナにおこしてきた魯庵が、Boje, moi をボジェ、モアという発音に復元したことは理解できる。
- 9 ゴーグリ、ドストエフスキーなど一九世紀のペテルブルグ文学には人間関係を示す官位名が書き込まれている。ゴーゴリの『鼻』は八等官の主人公の鼻が逃げ出しいつの間にか五等官に任ぜられたため、鼻のほうが偉くなって本人を見下す、という筋である。
- 10 たとえば「窓前^{まどまへ}に列べた下物は胡瓜^{きゅうり}と黒「ビスケット」と魚類の切身で」、「大形の青色の毛^{めんべい}の「ハンケチ」を頭に巻付け」、「キャベージ、スープ」があります「…」昨晚調理^{ごしら}いて置いたんですけんど」など、「 」内の英単語はそれぞれ、黒パン（の乾パン）、プラトーク、シチ、といったいかにも典型的なロシア情緒あふれるレアリヤだったことが明らかである。ロシア語からの直接訳をしたならばおそらくロシア語のままにおかれるであろう箇所であり、英訳を介したためにロシアの大事なレアリヤが失われ「ロシアの香りがとんでしまった」と言える箇所。
- 11 註7参照。ロシア語原典からの直接訳と英訳者の解釈を加えた英訳とを共に訳文作りに生かした、と肯定的に評価することができる訳が魯庵の場合指摘できる。協同訳は、直接訳、重訳、の長所を併せ持つことに成功する可能性がある、と言ってもよいだろう。
- 12 魯庵「原文の印象と譯文の趣致」『文章世界』明治四二年一二月
- 13 四つの引用のうち、1) だけは、英訳脱落（補完）部そのものではなく、その直後の訳文であるから、従って英訳テキストを並べて示すことができる。原典と英訳を対比較勘した際、脱落が終わった縁部分はまだ二葉亭の一語一語のチェックの範囲であり他の部分に比しても英訳に厳しいところだろうと考えられる。
- 14 『書物展望』昭和八年三～九月
- 15 四十一通の書簡（書簡番号一八九〔明治三八年三月三〇日付〕から二三五〔同一〇月一日付〕までで、長文のものが多く二葉亭全集にして162～228頁までを占める。
- 16 一方、楽々と名文を書く魯庵の文章力が二葉亭の間接的な自己実現にもつながったのではないだろうか。のち魯庵に師事した木村毅が魯庵の直話として、明治四一年に『朝日新聞』からロシアへ派遣されるにあたって金が入用になったため、二葉亭が魯庵に明治三〇年に雑誌『太陽』に訳載した「うき草」（ツルゲーネフ「ルージン」）の単行本としての出版を委託し「〔雑誌連載時には〕いい加減にやったから、かなりひどい。君、英訳〔ガーネット訳〕と対照して、朱を入れてくれ」と頼んだという話を記録している（木村毅『私の文学回顧録』青蛙房、昭

和五四年)。二葉亭が自分の訳文に不満であり、協同訳の効果を感じ、自分の訳稿を魯庵に文学作品として彫琢してもらうことを願うようになったことを示す貴重な挿話である。また、同挿話は、ふたりの協同訳において訳文づくりは最後まで魯庵が行っていたことも傍証する。

- 17 ウシャコフのロシア語辞典(Толковый словарь русского языка: в 4т./под ред. Д. Н. Ушакова, М., 1935-40)には、この語義の用例として、ドストエフスキーの作品から“Под стол подстилают чахоточный коврик. [テーブルの下に粗末な敷物が敷かれる]”という文を載せている。
- 18 “земные интересы [世俗の興味]”などの用例が挙がる。
- 19 例えばドストエフスキーの処女作『貧しき人々』は、中庭にしか窓がない部屋に暮らすジェーヴシュキンとヴァルヴァーラが、互いの窓の明かりやカーテンなどを中庭越しに見ながら文通するという話である。
- 20 こうした、「ペテルブルグ都市文学」としての『罪と罰』の読み解きは、ロシア本国ではいわばアプリオリに為されてきたと言ってよいと思う。一九世紀ロシア文学は、明治時代の日本文学が東京(帝国大学、神楽坂、新橋停車場など)を舞台に地名と共に書かれ読まれたリアリズムの都市文学であったのと同様に、ペテルブルグに住む作家達によって書かれペテルブルグの雑誌に掲載されペテルブルグの都市住民に読まれた。しばしば実際の事件や実在の人物をモデルにして書かれ、それを前提として読まれることもあった。『罪と罰』においてイニシャルで書かれた地名も冒頭の「K... 橋」はコクーシュキン橋、「S... 広場」はセンナヤ広場、そのほかソーニヤの住所、ラスコーリニコフの住所、金貸しの老婆の住所もモデルによりまた作中の解説により読者には自然に伝わっていた。ドストエフスキー文学の場合はまた、妻アンナへの研究者の詳細な聞き取りによって作中の地名が特定されてもいる。

筆者は1990年、ペテルブルグ(当時はレニングラード)在住の在野の文学史家ブルミーストロフ氏に一九世紀のリアリズム文学のペテルブルグ都市文学としての解釈の仕方を街路を共に歩きながら仕込んでいただいた。ここに記して記憶する。

- 21 スヴィドリガイロフもまた、地方の領主であるが、ドゥーニャを追ってペテルブルグにやってくる、その登場場面において“и цвет лица был свежий, не петербургский [そして顔の血色は生き生きとしていて、ペテルブルグの顔色ではなかった]”と描写されていた。
- 22 他の登場人物も、例えばボルフィーリイがラスコーリニコフに対しても、こちらを口にしている。現代ロシア語では Прощай は永訣にはば限られ、特に再会の予定が無くとも До свидания であるが、この時代には Прощай のほうが定型であったとみられる。
- 23 英訳では fully と単なる強調になっているが、ロシア語の буквально верить (文字通り信じる) というのは聖書の記述を、特に死者の復活を、文字通り信じるオーソドックスな信仰であり、例えば火葬の否定などにつながる。